

新入社員のみなさんへ 言葉の“資産”を増やそう

大阪大学大学院
文学研究科 名誉教授

金水 敏



仲間内の会話では、言葉に新規さ、強さが求められる。新しい言葉、強い言葉を用いることで、自分の中にある情動が言いあてられた気持ちになれて爽快感が感じられるし、その情動を共有することで会話が盛り上がるからである。特に、物事を形容する言葉、程度を強調する言葉に、自然と新規性や力強さが求められるし、そういった言葉が流行語となることも多い。

思いつくままに例を挙げれば、形容詞として「やばい」「エモい」「*うっせえ」、程度副詞として「めっちゃ」「*びったびたに」、動詞として「刺さる」「沁みる」、名詞として「*ゴン攻め」「推し（*推し活）」などを挙げておこう（「*」を付けた言葉は「現代用語の基礎知識選・2021ユーキャン新語・流行語大賞」にノミネート）。

この中でも、「やばい」「めっちゃ」はもう歴史も古い言葉で、「やばい」は東京を中心に、「めっちゃ」は関西を中心に広まって今や全国の言葉である。「エモい」「エモーショナル」が語源とも言い、また「えもいわれぬ」に引っかけているとも言う。爆発的な激しさはないが、気持ち強く揺さぶる物事を評するときに便利に使われる。「うっせえ」は高校生の覆面歌手Adoの『うっせえわ』の流行によってよく耳にするようになった。女性がこんな強い表現を使ってもいいんだという衝撃があった。「びったびたに」「ゴン攻め」は2021年東京オリンピックのスケートボード競技・ストリートで解説を務めたプロスケートボードの瀬尻稜選手が使っていた言葉で、視聴者に強い印象を与えた。

これらの言葉は、もともと形容詞が少ないと言われる日本語に新たな言語資源をもたらす表現と言えるし、新しい言葉を日常で使いこなすのはそれ自体が快楽と言える。しかし逆に多用しすぎると表現の貧困に繋がるし、また新語・流行語は得てして会話の品位を下げる効果

もあり、使う場面に留意する必要がある。例えば目上の人と食事をしていて思わず「これ、やばい」と言ったら、場合によっては場の雰囲気壊すことさえある。

新しい職場に入るなど、人間関係も大きく変わることの多い4月である。自分のふだんの言葉遣いをチェックするのにいい機会かもしれない。その上で、例えばもし「やばい」「エモい」「めっちゃ」が使えないとしたらどんな表現ができるか、日頃から自分の言葉遣いの言わば「資産」を増やしておくことも心がけたいところだ。そのための「投資」としては、もちろんネット記事・YouTube・テレビ・ラジオ等、常に情報のアンテナを広げておくことが必要だし、やっぱり本を読むのが古典的ではあるが効果的なので、今さらながらお勧めする次第である。

金水 敏(きんすい さとし)

1956年大阪府生まれ。東京大学大学院修士課程修了。大阪女子大学講師、神戸大学文学部助教授等を経て大阪大学大学院文学研究科名誉教授。日本学士院会員。博士(文学)。専門は日本語の文法史および役割語の研究。編著書に『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』(岩波書店、2003)、『日本語存在表現の歴史』(ひつじ書房、2006。同年新村出賞受賞)、『く役割語』小辞典』(研究社、2014)。